

目的地は校舎の端っこの方にある、コンピュータ演習室である。

緒岸は「研究部と言う部活に所属している。研究部と言うのは名前だけのもので、主な活動は物を作って適当に公開していくと言うとても緩いものだ。

昔は大会に参加する、何かに展示する作品を作る等積極的に関外に向けて発表していたらしいが今はそのような活動はやっておらず、皆好きなものを作って

適当に公開するだけになった。緒岸は前の部長になぜこうなったかを聞いたのだが、主な理由は大会の日に遅刻する人が多いので出なくなった、と言うことらしい。

顧問の先生も特に協調性を重視するタイプでもなく、大会にできることないまま次の世代に写ってしまい文化が途切れたと言うわけだ。

入部時は今の7倍ほどいたが日に日に来なくなり、ほとんどが幽霊部員である。

たまにあるイベントや、勉強会などにだけ来る人が半分程度で、緒岸も全員の顔を認識していない。

緒岸はその「研究部の部室であるコンピュータ演習室に向かって歩き続けている。

演習室に近づくにつれて特別教室が増え、廊下の雰囲気は段々と淋しくなっていく。ここら辺の廊下になって来ると電気も消えているので日光のみを頼りに廊下を歩く。

遠くの方で楽器の音や掛け声などの音が聞こえるが、自分の周りには人一人もいない。あるのは薄暗い中赤く揺らめく消火栓ぐらいである。

演習室の前に着き、古ぼけた心もとない鍵付き扉が出迎える。鍵は演習室脇の消火器箱の中に隠されている。これは部員が顧問のところに行かなくてもいいと言う顧問の配慮だ。

多分顧問も面倒だと思っている故、利害の一致があるからだと緒岸はほんのり思うが、便利なのでそつとしておく。鍵を使い扉を開け中に入る。

窓はあるが他の校舎の影になっており少し薄暗い。掃除は毎日行われているらしいがそこはかとなく埃臭い。

薄汚れた空間に古いモデルのパソコンが40台ほど設置されている。そこまで新しいわけではなく最近はコンピュータが必要と騒がれているが自分の学校は大丈夫かななど余計な心配をしてしまう。

いつものように奥の方のスペースに座る。特にこの席に愛着があるわけではないがこの席が一番扉から離れているので厄介ごとに巻き込まれる可能性が

低いと考え、この席を毎回利用している。席について一息ついたところで鞆からコンピュータを取り出した。高校の規則でコンピュータについて規制されてないので

理由に持ち込める。この高校の好きなポイントの一つだ。

「昨日どこまで進んだっけ」  
山路を登りながら

そう呟きながらをコンピュータを開いた。今朝の作業画面が表示される。今作ってるのはWebページ用のライブ러리だ。実装途中の部分の完成しないとなあとと思いキーを叩く。

カタカタ……、キーを叩く音と、たまに発生する沈黙。

静寂の中、自分のキーの音のみが場を支配する状態。この状態の時一番脳を使えると思っっているので緒岸はこの時間が好きだった。

薄暗く埃臭いが誰にも邪魔されない、小さな城はものを作るにはもってこいの空間だ。

■

比較的簡単な開発がひと段落付き、少し難しい問題に直面した。苦い顔をしていると扉が開く音が教室に響く。

「おっつー、遅くなったー」

数少ない活動的な「研部員が静寂を破る。緒岸は作業を中断し扉の方からこつちに歩いて来る短髪少女を見た。